

会場の 対話

会場の参加者からの質問と、
それに答える講師の方々のお話を
掲載いたします。

進行 天野 礼子
(アウトドアライター)



天野 私は、この京都大学で二〇〇三年に誕生した「森里海連環学」に、翌年からお手伝いをしております。来年、二〇一〇年は「生物多様性戦略締結国会議」が日本で開かれますので、マスコミは来年を「生物多様性年」と位置づけるのではないかと思います。農業においても、生物多様性を育む農業についてよく考えられるようになって、二〇〇五年に農林水産省が初めて、「これまで農業を多量に大地に入れてきたことや、コンクリートで水路をおおってしまうこと、干潟を埋めてしまうことなどが、生物の多様性にとって“負の影響”を与えてきた」と発表しました。農林水産省自らが、「農業の害」を認めたのですね。

「森里海連環学」は、そうした価値観が変わりつつあるときに、京都大学から、「二十一世紀は二〇世紀と同じことをしていれば地球が持たないし、日本も持たない」ということを危惧し、異分野の学者が連携して解決策を見つげようと考えられた質問です。

今日、皆さんのお手元に、私のほうから二つの資料を入れさせていただいております。一つはこの時計台集会にもお出でいた

だいた養老孟司先生を委員長とする「日本に健全な森をつくり直す委員会」から発信した提言で、そのタイトルは「石油に頼らず、森林（もり）に生かされる日本になるために」です。九月十八日に菅副総理に、一〇月三〇日には、農林水産副大臣に手渡したものです。「石油に頼らず、森を生かそう」という提言ですが、それには持続可能な森の使い方が大事だということを行っています。

もう一つ、「対馬から林業を考える」というチラシを入れていきます。このシンポジウムのサブタイトルには、「“森里海連環”思想の提案」とあり、この京都大学フィールド科学研究センターも後援団体に入っています。共催団体のところ、「日本に健全な森をつくり直す委員会」の次ぎに「“森里海連環学”実践塾」という団体が入っています。これは何かと申しますと、京都大学の「森里海連環学」を全国の工務店の方々が学んで、お施主さんにもそれを教えてゆき、日本の森から出る材をきちんと使つて、「森を元気にしよう」と考えたグループです。彼らは、きちんと森を管理している森林組合などから出る材を使つて家を建てていこうとしています。こういう動きが広がっている

ということもお伝えしておきます。

会場 今、森で働いている人が生活していけないという現状に目を向ける必要があるのではないでしょうか。学術的な視点の話だけではなくて、生活の視点からの話をもっとされる必要があるように思いますが。

天野 今あなたがお話されたことと同じような話を、京都府日吉町森林組合の湯浅参事から聞きました。湯浅さんは「それを何とかするのが、本当の『森林・林業再生』だ」とおっしゃっています。

会場 先ほど会場から発言された方は、林業の現場、生活の実感から話をすべきで、そこを忘れて「環境」や「森里海」といった、昨今はやりの話は机上の空論になるとおっしゃっておられると思います。柴田先生、吉岡先生いかが思われますか。

柴田 こういう話し合いをするときに、常に「最もその実態を

見てもらえないのが『山だ』ということが言われています。例えば木材に関して、その価値判断を山側から、「木材そのものの価値はもつと高いはず」と言いたいのですが、その話が川下になくつながつていけません。その辺をつなぐような努力とか、川下、つまり消費者側の木材に対する価値観を上げる提案、評価というものをやつていこうと考えています。そのための提案をするのが、この「木文化プロジェクト」であろうと考えています。

しかし今、即座に、「じゃあ、こうなります」とは言えません。あくまで、自ら調査をして、得たデータに基づいてなにがしかのことをこれから言つていくのだとご理解いただきたいと思います。

吉岡 私自身、社会系の調査はほとんど経験がないので間違っているかもしれません。環境問題をやっていると、自然科学者の頭から抜けているのが、その問題に関係して生きている人達がいるという感覚です。でも、それが、この「森里海連環」の「里」の部分に入っていると考え、私はこのプロジェクトをやろうと思っています。ただ、やれる範囲は限られていますし、実社会で生きている方達に影響を及ぼすということがないかもしれません。

我々がやれるところは、先ほど若干ご紹介しましたように、環境意識というものを中心に据えて、林業で暮らしていけない、林業だけではなくそのほかのところでも暮らしていけないというところにおられる方々の意識と、環境というものはどういふものであるかということを感じているその他大勢の意識が、いかに違っているのか、合わないのか、あるいは合うのかということからでしょう。先ほど言いました上流、下流の問題ですね。たとえば、林業に携わっている人達、上流の思いというものの、暮らしというものと、下流の人達が断絶してしまっている。都会の人達は、森がどういふことか知らない。木でできた鉛筆があり、家があるということしか知らない。

自分たちが納めている税金がどこに使われるのかいうときに、森だけに限って言うと、森に自分たちの税金が使われることに意味があるのかどうかということを考えていただくためには、たとえば環境意識というものを調査しなければいけないでしょう。そのためには、森の環境をどういふふうの人々は意識しているのかということも、学問的に明らかにしていかなければいけないだろうと思つてやっているつもりです。

天野さん達の提言で、「林業を二兆円産業にする」という話があります。でも、それは将来像としてはあるかもしれないが、現状では二兆円のかなりの部分は税金でやらなければ日本の森林はよくなつていかない、林業は再生してゆかないと、個人的には思っています。別に、根拠はないのですけれども。

その時、一兆円なり何千億円というお金を森林のために入れていくことになります。その大半は、そこで働く人達の給料、生活のお金にするとしても、それに合意形成ができるかどうかというところが係わってくるだろうと思います。その時には、税金を納める人達が森林に関してやはり勉強していかないといけない。森とはどうなのか、森での生業とはどういうことなのかを知った上で、自分たちが払っているお金をどうするかということに関して政府にモノが言えらる。そういうのがやはり二十一世紀的な「賢い民」ではないかと思つています。そのため、われわれ自然科学者、社会科学者がどれだけのお手伝いができるのか、ということをやつていかなければいけないのかなあと思つております。

今、生活に困っている人達にどういふことができるか、少なく

とも私たち自然科学者から申し上げることではできません。今年始まった「木文化プロジェクト」で、まだまだ結果は出ませんが、そういうお手伝いを将来においてやっていきたいと考えています。的確な答えになつていないと思いますが。

天野 森側の方で、どなたか発言いただけませんか。

会場 森側とも里側とも言えないのですが。父が残した山が紀州にあり、そこを間伐する話が森林組合からあり、間伐をすることになりました。で、その間伐材で紀州の地に、「ログハウスを建てたい」と相談をしました。そしたら「自分の山の木を間伐して、その木で地元建てても、高くついちゃうからやめた方がいいよ」と言われました。何とかする方法はないのか、何かいい案がありましたら教えてください。

今は京都の桂川の上流の方に住んでいます。河原が大好きでして、そこに葛がたくさん生えているものですから、その葛で布作りをしようと考えています。そういうものを含めた、自然の全体的な利用を考えてはどうなのでしょう。過去は、

そういう文化が成立していたと思います。そういう視点を持つて、この「森里海連環学」というものをやられたらいかがでしょうか。

長谷川 山の生産費について、少しお話しさせていただきます。

いままで日本の林業は労働集約的な構造のままでした。数字で言いますと、大体ひとり一日二・五立方メートルくらいの生産効率で、生産費が二万円くらいかかってしまう。欧米では二十五立方メートルくらい出すんですね。で、生産費が三千円くらい。日本でも近年ようやく、作業道を付けて、高性能な機械を入れた組合とか素材業者は、三千円から五千円くらいで出せるようになってきた。今、その格差が一番大きい時期だと思っています。今はまだ、材を安く出そうという仕組みを全国で作つていくと動き出しているところです。ですから、ほとんど意識改革も機械化もまだまだで、その辺りが整っていない地域ですと、やはり従来通りお金がかかってしまう。

恐らく、森林組合に相談されたということは、あなたは森林組合員になられているということですので、その辺りをもっとプ

ツシユしていただき、組合のやり方を変えてもらうことは可能だと思っています。

会場 二回目の集会に参加して以来ですが、あの時思った進むべき方向が、進み始めたなあと実感しました。今日は来てよかったと思っています。

当時、公開講座で芦生へ行きました。いろいろお話をさせていたでいたなかで感じていたのが、まさにテーマとなつています。森林を生かしていく際に、木をどういうふうに使おうかということ、川上と川下がつながりながら、どうやって森林を再生していくかということです。確かに、大きな夢みたいな話なのですが、「山の価値をもう一度認める」ところからしか出発できないのではと思っていました。

今回、平沼先生が建築家として参加された、その意義はすごく大きいというふうに思います。平沼先生のような建築家をもっと増えてほしい、そういう建築家のグループをもっとできたらとか、あるいは、特に工学部、土木工学とかの関係の方で、設計される公共工事についても、これまでのような設計ではな

くて、デザインとか材料も含めた山との関わりに資するような、そういうものがこの研究の中から枝葉として広がっていく、技術的にも社会に普及するような、そんな流れになつていけばと思います。実は五年前にも、工学部の先生にもぜひ入ってもらつたからお話ししましたが、まあ、難しいと思いますが、これから必要なことは「融合」と言うことではないでしょうか。

柴田 ありがたいご提案だと思えますし、そういう方向性で進められたらいいと思います。工学の中でも、一般に分かりやすいのは建築系です。ダイレクトに素材として使っていく。それが即座に、自分の生活の中に取り込まれてくる。そういう意味で、理解も得やすいでしょう。まずは建築だと思えますが、それ以外にも、エネルギーに使うとか、目に見えない、木とは思えないけれど、木が材料になつていくような工学的利用というのは、技術的な開発が進んでいます。実は、これは木の粉からできてくるのか。その辺は逆に、我々のほうから「こんな使われ方をしているのですよ」という情報発信というか紹介というか、そういうことをやっていけばいいのではないかと思います。

皆さん共通認識としておありでしょうが、木をそのまま、二酸化炭素として空気中に返さない。つまり、ストックとして、木質資源をどんどん使っていく話を。そこでも工学系のアイデアというものはどんどん使えます。あるいは、工学系に限らず、森林科学系とは違う異分野でそういう話はどんどん進んでいるというのは現実です。我々はそこへ、山から出たものをよりスマートにしないでいく努力をする、それが必要なだろうと思っています。

会場 私、奈良の吉野にささやかな山を持っているものです。若いときから、少しずつ植林をしてきていますが、非常に閉塞感を持っていました。どうして雇用を維持していくか、あるいはどのように発展していくかということが全く分からない。数年前の林業白書には、観光林業だとか、あるいは都会からボランティアで云々とか、そんなことしか書かれていない。どうしたらいいのか、全く手詰まり、閉塞だったのですね。そんな時、竹内典之先生にこの時計台集会でお会いして、関係の話を聞いて、やっと風穴が空いた、道が見えたと、今喜びに満ちているといった状況です。先生からいろいろ話を聞いていると、

ものすごく地道な研究を積み重ねられて、やっとこういう結論、ここへ至ったということもよく分かります。実務を担当するものとして、前へ一歩でも進めていきたい。これがまた、雇用にもつながっていくと、雇用の拡大に少しでも貢献できればと思います。実際に進めるときに、森林組合の方々とうまく連携していきたいと思うのですが、現在の森林組合の動向とか、あるいはそういうことについて天野さんにお話を願えないでしょうか。

天野 森林組合は、全国に七二〇ほどあります。その組合に対して、三年ほど前から、全国森林組合連合会がメニューを出し始めました。林野庁と一緒に。梶山さんとか湯浅さんという方が、「森林プランナー研修」などというのをなさっています。それは、ひとり一人の所有形態が小さい日本で、所有者に代わって森をどういうふうに使っていく、どう林業にしていくかということを考える人を育てることです。そういうことが三年前から急ピッチに進んでいます。全国の森林組合がすべて急ピッチで動いているわけはありません。七二〇の組合のうちの六〇〇

くらいに、「そういうメニューがあるよ」というようなニュースが届いてきている状況です。そんな中で今、今回の林野庁の第二次補正予算と「森林・林業再生プラン」というのが作られて林野庁が大きく改革されようとしている、というのが現状です。

会場 海の漁業に携わっています。話を聞いていますと、「つくること」に焦点が当たっているように思いますが、海からすると、上流部のものが全部海に入ってくるわけです、ゴミとして。そのゴミが、いかに自然に消えてくれるか、消滅してくれるかというところも、この学問には視野に入れてもらいたいと思います。水の問題にしても、戦前くらいまで何百年と続いてきた有機農業が、戦後、化学肥料、農薬が使われ出して、海に入ってくる負荷が全く違っています。下水も処理されて海に入ってきます。海自体も、それを受け入れる自然の浜辺もなくなり、湾内の潮の流れもなくなっています。ですから、全体を見て、今の社会をどういう風にしていくのかを、現場で働く人と、研究者と、市民が一緒に考えることが大切だと思います。



天野 礼子 あまの れいこ

●アウトドアライター

1953年、京都市生まれ。中学、高校、大学を同志社に学ぶ。88年、文学の師・開高健とともに“川の国”のダムに警鐘を鳴らす国民運動を立ち上げ、育てた。近著は『21世紀を森林(もり)の時代に』。04年から高知県で、森里海のつながりを取り戻す社会実験を展開中。有機農業への助力も開始した。

天野 今のお話は、今後のご提案として受け止めさせていただければと思います。そろそろ予定の時間が来てしまいました。今日お越しの皆さまは、「森里海連環学」を応援し、育て、自分たちのために使おうと考え、そのために集まっておられるのだと思います。また来年もお会いできればと思います。